旧城下町赤穂の景観まちづくりにみる地域の記憶

片柳 勉*

キーワード:都市整備、景観復元、景観創出、地域の記憶、赤穂

I はじめに

1. 研究の目的と方法

日本の主要都市では、第2次大戦中にアメリカ軍の空襲により歴史的景観を失い、戦災を免れたところでも高度経済成長期の都市開発により歴史的景観の破壊が進んだ。そのような状況下、1975年に文化財保護法の改正により伝統的建造物群保存地区制度が発足し、旧城下町、旧宿場町、門前町など、全国各地に残る歴史的町並みの保存が図られるようになった。しかし、その後のバブル期の開発や相次ぐ地震や津波などの自然災害で、都市に残された歴史的景観は依然として危うい状況にある。

歴史的景観の構成要素の一つである歴史的建造物は地域のアイデンティティの拠り所として貴重な存在であり、住民や来街者にとっては地域の記憶10を想起させる重要な役割を果たす。そのため、各地で歴史的建造物の保存に加えて歴史風の建造物の建設が行われる。なかでも旧城下町における消失した天守の再建は住民に精神的な拠り所を提供するものとされ(木下,2007,p112)、言い換えれば、旧城下町で行われる城跡の整備は、忘れかけられた地域の記憶を取り戻す事業とみることができる(片柳,2011)。

今日、地域の魅力を高めるために、歴史的景観が保存されたものか創出されたものかを問わず、景観整備において地域の特性を活かした修景事業は不可欠となっている。これについて筆者は、イギリスのストラトフォード・アポン・エイヴォンでは歴史的建造物を保存する一方で、1900年代初めに一部の建物で修景が行われ、より魅力的な景観が生まれたことを報告した(片柳,2007)。また、川島ほか(1999)は、静岡県掛川市における城下町風街づくり事業で、一部で始まった修景が住民意識に影響を及ぼし、地区全体に拡大していったことを明らかにしている。一方、中西(2007)は、滋賀県長浜市の黒壁スク

エアでは過剰ともいえる「創りこみ」が行われ、商業主義が全面展開した一種の景観創出になっていると批判的に述べている。これまで、復元・創出された景観が持つ意義、景観が想起させる地域の記憶についての研究には、沖縄県八重山郡竹富島を事例とした福田(1996)の研究があるが、今日、全国各地の都市で行われるようになった景観整備によるまちづくり、すなわち景観まちづくりの意味づけをするためにも、都市部での事例研究の蓄積が待たれる。

そこで本研究では、城跡の復元と城郭風の景観整備を 進める兵庫県赤穂市を対象とし、歴史的景観(旧城下町 の景観)の復元・創出の意義について、地域の記憶とい う観点から明らかにすることを目的とする。

研究は以下の手順で進める。まず、城郭の整備、特に 天守の復元と都市整備の動向について第2次大戦以降を 中心に概観し、その流れの中に赤穂城跡の復元整備事業 を位置づける。次に、赤穂市における城郭復元事業と景 観整備事業を取り上げ、それぞれの事業の歴史性につい て考察する。景観整備事業として、「平成の城下町づく り」をテーマとした町並み整備事業を取り上げる。最後 に、城郭の復元事業と沿道での景観整備事業それぞれの、 地域における意義および地域の記憶との関連について考 察する。現地では景観調査、赤穂市役所および赤穂市教 育委員会での資料収集および聞き取り調査を実施し、城 郭の復元事業と「城郭風」町並みの整備事業についての 情報を得た。

2. 研究対象地域の概要

赤穂市は、兵庫県南西端に位置する人口約5万の都市で、中心市街地の加里屋地区は千種川河口のデルタ上に発達した旧城下町である(図1)。1960年代まで製塩業が盛んであったが、今では全ての塩田が埋め立てられ、工場や住宅地へと変わった。

* 立正大学地球環境科学部

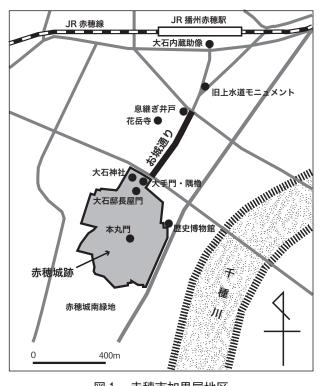


図1 赤穂市加里屋地区 (赤穂市都市計画図より作成)

赤穂市は忠臣蔵ゆかりの地として知られる。播州赤穂駅の駅舎には赤穂義士にまつわる書や絵のパネルが飾られ、駅前に赤穂浅野家の家老であった大石内蔵助の銅像が建てられるなど、この地が「忠臣蔵のふるさと」であることを来街者に知らせてくれる。駅の南西約1kmのところに市のシンボルである赤穂城跡があり、1971年に国史跡に指定され、城内の二之丸庭園と本丸庭園は2002年に国名勝に指定されている。赤穂城跡に向かう途中には、忠臣蔵ゆかりの「息継ぎ井戸」が再現され、沿道は城郭風の町並みに整備されている。

このほか忠臣蔵ゆかりのものとして、2014年に111回目を迎えた赤穂義士祭がある。毎年12月14日に開催され、毎回数万人の観光客を集めている。前夜祭で赤穂城跡の天守台にイルミネーションで天守が浮かび上がり、義士祭当日は町なかで「忠臣蔵パレード」が行われるなど、赤穂市が「忠臣蔵のふるさと」であることを市内外に示す一大イベントとなっている。

Ⅱ 天守を中心とした城郭の復元と都市整備の動向

軍事拠点であり旧体制の象徴であった城郭は、1873(明治6)年の太政官達「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」いわゆる「廃城令」によって次々と取り壊され、さらには町自体が大きく改造されていった(佐藤, 1995,

p34)。しかし、旧城下町にとっての城郭、中でも町の中央に高くそびえ立つ天守は、権力の象徴としてではなく地域のシンボルとして、あるいは地域活性化・観光振興のための装置として取り戻すべきものとなった。

復興・模擬天守の建設は、第2次大戦以前から行われている。主だったものでは、大阪で、大阪城公園整備事業の一環として1928(昭和3)年に当時の大阪市長・関一のもとで大阪城天守の再建が計画され、1931年に復興天守²⁾の大阪城天守閣が竣工した。これについて橋爪(2012, p56)は、市民から多大の寄付が集まったことに触れ、「市民の郷土への愛を背負い復活した」と評している。このほか、三重県の伊賀上野城では、1935(昭和10)年に私財によって模擬天守が建てられた。しかし、天守の再建や新設が盛んになるのは、第2次大戦以降になってからである。

第2次大戦時の旧城下町では、城郭内を軍関係の施設が占めたためアメリカ軍の爆撃の標的となった。そのため国宝天守を含む数多くの天守を焼失し、旧城下町はその象徴を失ったまま戦後を迎えることになった。第2次大戦中に天守を失った都市では、自ずと旧城下町としてのアイデンティティの拠り所を取り戻すことに関心が向けられた。表1は、第2次大戦以降の全国における主な天守(復興・模擬天守を含む)の建設動向を示し、図2はその分布を示したものである。天守の建設は1950年代後半から60年代にかけて西日本に集中し、1950年代では、和歌山城、広島城、名古屋城、大垣城など、第2次大戦中のアメリカ軍の空襲によって焼失した天守の外観復元が進んだ。1966年には、同様に岡山城と福山城で天守の外観復元が行われている。

他方、明治初期またはそれ以前に天守が取り壊された 旧城下町では、地域のシンボルを取り戻すことが目的で はあったものの、もともと天守が実在しなかった旧城下 町でも地域活性化や観光施設化を目的として、天守を建 設する例が見られた。この時期は、ほとんどの天守が鉄 筋コンクリート造であったことが特徴で、中川(1996, p111)は、史実にない天守の建設について、城郭の形態 のみが利用されていると指摘している。「昭和の築城ブーム」とも称される1950年代後半から60年代にかけての旧 城下町における天守の建設には、まちづくりという観点 はまだ希薄であった。

1970年代に入ると築城ブームは収まり、1970年に高島城(長野県諏訪市)天守の再建が見られる程度である。 その後1980年代から2000年代にかけて再び各地で城の建設が盛んとなり、いわゆる「平成の築城ブーム」を迎え

74.5几分	名 称	武夫區	構造	44 Dil	備考
建設年	名 称 富山城	所在地 富山県	構造 鉄筋コンクリート浩	種 別 模擬	<u>備 考</u> 実在せず
1954				: 快級 : 模擬	
1954	岸和田城	大阪府	鉄筋コンクリート造		江戸末期に焼失
1956	岐阜城	岐阜県	鉄筋コンクリート造 鉄筋コンクリート造	模擬 模擬	江戸初期に取り壊し
1958	浜松城	静岡県		1	江戸初期に取り壊し
1958	和歌山城	和歌山県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1958	広島城	広島県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1959	岡崎城	愛知県	鉄筋コンクリート造	外観復元	明治初期に取り壊し
1959	名古屋城	愛知県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1959	大垣城	岐阜県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1959	小倉城	福岡県	鉄筋コンクリート造	復興	江戸末期に焼失
1960	小田原城	神奈川県	鉄筋コンクリート造	外観復元	明治初期に取り壊し
1960	熊本城	熊本県	鉄筋コンクリート造	外観復元	西南戦争で焼失
1961	松前城	北海道	鉄筋コンクリート造	外観復元	1949年に焼失
1962	岩国城	山口県	鉄筋コンクリート造	復興	江戸初期に取り壊し
1962	平戸城	長崎県	鉄筋コンクリート造	模擬	実在せず
1964	中津城	大分県	鉄筋コンクリート造	模擬	実在せず
1964	島原城	長崎県	鉄筋コンクリート造	復興	明治初期に取り壊し
1965	会津若松城	福島県	鉄筋コンクリート造	外観復元	戊辰戦争後に取り壊し
1966	岡山城	岡山県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1966	福山城	広島県	鉄筋コンクリート造	外観復元	第2次大戦時の空襲で焼失
1966	唐津城	佐賀県	鉄筋コンクリート造	模擬	実在せず
1968	越前大野城	福井県	鉄筋コンクリート造	復興	江戸末期に焼失
1970	高島城	長野県	鉄筋コンクリート造	復興	明治初期に取り壊し
1980	今治城	愛媛県	鉄筋コンクリート造	模擬	江戸初期に取り壊し
1982	上山城	山形県	鉄筋コンクリート造	模擬	江戸初期に取り壊し
1983	長浜城	滋賀県	鉄筋コンクリート造	模擬	江戸初期に取り壊し
1986	福知山城	兵庫県	鉄筋コンクリート造	外観復元	明治初期に取り壊し
1989	清洲城	愛知県	鉄筋コンクリート造	模擬	江戸初期に取り壊し
1991	白河小峰城	福島県	木造	復元	戊辰戦争で焼失
1994	掛川城	静岡県	木造	復元	江戸末期に取り壊し
1995	白石城	宮城県	木造	復元	明治初期に取り壊し
2004	大洲城	愛媛県	木造	復元	明治初期に取り壊し
2004	新発田城	新潟県	木造	復元	明治初期に取り壊し

表 1 第 2 次大戦後に建設された主な天守(1954~2004年)

(各城の公式 HP 等より作成)

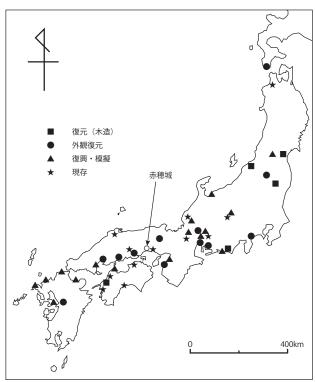


図2 第2次大戦後に建設された主な天守および現存天 守の分布

(各城の公式 HP 等より作成)

た(木下,2007,p146)。この時期は、明治初期またはそれ以前に取り壊された天守を再建する事業が主で、天守の建設がまちづくり全体の中に位置づけられるようになった。滋賀県長浜市では、1983年に市と市民有志を中心に長浜城天守が郷土博物館として再建され、後の「博物館都市構想」というまちづくりにつながった。また、静岡県掛川市では、1991年に「城下町風街づくり事業」が開始され、中心市街地では城郭風デザインを施した建造物が数多く見られるようになった。文化庁の方針により、1990年代以降の城郭の復元は木造で行われることが基本となり、1991年に白河小峰城(福島県白河市)の天守が木造で復元された。以後、木造による復元が相次いだ。

本研究の対象地域である兵庫県赤穂市では、赤穂城本 丸に天守台はあるものの天守自体は建てられなかった。 1980年代以降、文化財の復元がまちづくりと関連して語 られるようになったが、赤穂市でも文化財を活かした地 域づくりをテーマに、本丸に通じる枡形門の復元工事、 城跡の発掘および大名庭園の復元を進め、それと並行し て「平成の城下町づくり」をテーマに城郭風の町並み整 備を行っている(赤穂市教育委員会生涯学習課,2004)。 次章では、赤穂市における城郭の復元事業と町並み整備 事業の動向について概観し、それらの歴史性、地域の記 憶との関連について考察する。

Ⅲ 赤穂市における城郭の復元と景観まちづくり

1. 赤穂城跡における復元事業

赤穂城は、1466(文正元)年から1483(文明15)年にかけて、岡光広によって千種川河口に築かれた平城である。現在見られる赤穂城の遺構は、浅野家時代(1646年~1706年)に築かれたものである。かつて三之丸には大石内蔵助をはじめとする重臣の屋敷が建ち並び(生野・篠野,2002)、浅野家廃絶後も江戸時代を通じて侍屋敷が見られた。

1873 (明治6) 年に赤穂城は廃城となり、堀と石垣を残して城内の建物はことごとく破壊された。その結果、城内のほとんどが水田として利用され、建物は皆無であった。その後、1900 (明治33) 年に旧三之丸に大石神社が創建され、1928 (昭和3) 年には旧本丸に旧制赤穂中学(後の兵庫県立赤穂高等学校)が設置された。

1955年に大手門と大手隅櫓が復元されたが、本格的な 整備は1972年に二之丸庭園整備事業が、1974年に石垣の 修理事業が開始されたことに始まる (表2)。その後、1978年に赤穂城の代表的な遺構である大石邸長屋門の解体修理が行われた。1980年代に入ると、旧本丸での整備事業が始まり、そこに通じる各門が復元された。1989年には、外壁を白壁・なまこ壁とした城郭風デザインの歴史博物館が開館している。

図3は、本格的な整備事業が始まる直前の1979年の赤穂城内の土地利用を示したものである。旧本丸全体を県立赤穂高等学校(旧制赤穂中学)の敷地が占め、旧二之丸の南西部はグラウンドとなっていた。旧三之丸では、大石神社の敷地が一部を占め、それ以外は宅地・商業地、農地となっていた。旧三之丸には最大で90軒余りの住宅と商店が建ち並び、赤穂市民の日常的な生活空間が広がっていた。

図4は35年後の2014年の赤穂城内の土地利用を示したものである。旧本丸にあった赤穂高等学校は1981年に市街地南東にある塩田跡地に移転し、それにともない本丸門(写真1)と本丸庭園が復元整備された。また、旧三之丸では民有地の買い上げが進み、宅地・商業地と農地のほとんどが姿を消した。現在は東側の一部が武家屋敷公園として整備され、大部分は未利用地となっている。赤穂城跡では旧本丸、旧二之丸、旧三之丸で石垣や水堀などの復元も進み、江戸時代初期の浅野家時代の面影を

表 2 赤穂市における景観整備の動向(1955~2010年)

年	赤穂城跡整備関連事項	市街地整備関連事項	その他の関連事項
1955	大手門、大手隅櫓を復元		
1971			赤穂城跡が国指定史跡
1972	二之丸庭園の整備事業を開始		
1974	石垣の修理事業を開始		
1977		加里屋地区再開発事業を計画	
1978	大石邸長屋門の解体修理工事が完成		
1981	県立赤穂高等学校が城外に移転		
1982	本丸庭園の整備事業を開始		
1983	旧三之丸に武家屋敷公園が完成	駅前に大石内蔵助像が完成	
1989	本丸御殿の間取りを復元	赤穂市都市景観の形成に関する条例を制定	
	歴史博物館が開館		
1992	本丸門の復元工事を開始		
1993		加里屋地区再開発事業を断念	
1994		赤穂駅前大石神社線街路整備基本計画を策定	
1995		お城通りまちづくり推進協議会を設立	
1996	本丸門、本丸厩口門、大手門枡形を復元		
1997	刎橋門を復元	赤穂駅前大石神社線街路整備事業(~2005)	
		忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会を結成	
2001		駅構内に「誠忠義士伝双六」のパネル画を設置	
2002			本丸・二之丸庭園が国名勝
2003	番所風休憩所を整備		
2005		加里屋地区都市再生整備計画(~2009)	
2006			日本城郭協会による100名城に選定
2010	西仕切門を復元		

(赤穂市教育委員会資料より作成)



図3 赤穂城跡の土地利用(1979年) (空中写真,住宅地図より作成)



図4 赤穂城跡の土地利用(2014年) (現地調査により作成)

取り戻しつつある。しかし、1971年の国史跡指定以降に 土地の公有化が進み、かつて旧三之丸に存在した住宅は 城跡の整備に伴い撤去され、今は面影もない(表3)。

赤穂城には、浅野家以後³⁾は1702(元禄15)年に永井 直敬が3万3千石で入封し、4年後の1706(宝永3)年 に永井直敬が転封している。その後、森長直が2万石で 入封し、廃藩置県までの約160年間を森氏が治めている。 浅野家時代に比べて、森家が統治した期間は長いが、赤 穂城跡には浅野家時代を伝える遺構が多い。赤穂城跡に は現存する建物として近藤源八宅跡長屋門と大石宅跡長 屋門の2棟のみであるが、それぞれ浅野家家臣の建物の 一部として紹介されている。また、城郭内とその周辺に は、浅野家時代に重臣屋敷があったことを示す石碑と案 内板が赤穂義士会によって建てられている(写真2)。

赤穂城跡の復元事業において、地域にとってより好ましい、「忠臣蔵のふるさと」にふさわしい時代が選ばれているといえる。これについては、赤穂城跡整備基本設計報告書に「史跡・名勝を活用した市民が誇れる城づくり、まちづくり、人づくり(義士の町のシンボルづくり)」が整備方針にかかげられ、これに沿って復元事業が展開されていることにも表れている。事業の関係者である宮崎(2010)は、赤穂市の史跡・名勝庭園整備を通じた個性ある城づくりは、市民が誇れる地域づくりであると述べているが、赤穂城跡で浅野家時代が前面に出るのは必然なのであろう。赤穂城跡から想起される地域の記憶は、「忠



写真1 復元された本丸門 (2014年3月, 筆者撮影)

表 3 赤穂城跡における土地利用の変化

時期	本丸	二之丸	三之丸
江戸期	御殿・庭園	庭園	侍屋敷
	↓	↓	↓
明治期	公園	農地	神社・農地
	↓	Ţ	↓
大正期	学校	公園・運動場	神社・宅地・農地
	↓	↓	↓
昭和期	学校	公園・運動場	神社・宅地・農地
	↓	↓	↓
平成期	庭園・公園	庭園・公園	神社・公園・空地
		/ N. T/ E	+ 1 = + 1 = "b.\

(地形図, 空中写真より作成)



写真 2 赤穂義士の屋敷跡を示す石碑と案内板 (2014年3月, 筆者撮影)

臣蔵のふるさと」赤穂に他ならない。

2. 「お城通り」における景観創出

赤穂市中心部の加里屋地区は第2次大戦中の米軍の空襲を免れ、旧城下町特有の空間構造を残していた。しかし、道路の形状や幅員の狭さは、自動車交通時代に合わないものとなっていた。1977年に加里屋地区再開発事業が計画されたが、財政状況の悪化などの理由から断念された。その後1994年に、赤穂城跡の旧三之丸にある大石神社とJR播州赤穂駅とを結ぶ赤穂駅前大石神社線、通称「お城通り」の整備計画が策定され、1997年から2005年にかけて事業が実施された(図1参照)。この背景に

は、郊外への人口流失と加里屋地区商店街の衰退化に対し、赤穂駅前大石神社線をシンボルロードとして整備し、 商店街を再生し都市中心部の活性化を目指すことがあった(兵庫県まちづくり技術センター、2004)。

1994年に赤穂市により「赤穂駅前大石神社線街路整備基本計画」が策定され、翌1995年に「お城通りまちづくり推進協議会」が設立された。「お城通り」の街路整備では道路の拡幅に加え、お城通り交差点から赤穂城跡までの約400mの区間で、「忠臣蔵のふるさと」にふさわしい景観を生み出すことが計画された。「お城通り」は市街地景観形成地区に指定され、景観形成基準(表4)に適合するよう建築物等の新築、修繕等が行われた。景観形成基準では、建築物については階数を3階以下とし、屋根を和瓦葺きの平入り、色彩を黒または灰色系統にすると定めた。また、建物の外壁については、色彩を白または灰色もしくは茶系統にすると定め、沿道景観を和風に統一する基準となっている。

図5は「お城通り」沿いに建つ城郭風デザイン建築物の分布を示したものである。この図からは、沿道に景観形成基準に合ったデザインの建物が多数立地していること、特に沿道西側とお城通り交差点に近い通りの北側で外壁を白壁とした城郭風建物が連続していることがわかる(写真3)。また、一部の建物が外壁を茶系統としていることがうかがえる。一方、沿道東側と大手門に近い通りの南側では城郭風建物は少なく、沿道東側では駐車場が連続する箇所が散見する(写真4)。個々の建物を見る

		man etc. at tr.
階数		・階数は、3階建以下のものとする。
屋根	形態	・和瓦葺の平入りとし、屋根の勾配は周囲の建物と調和したものとする。
	色彩	・黒又は灰色系統の落ち着いた色彩のものとする。
外壁	位置	・通りに面する外壁の位置は、できるだけ隣家の外壁にそろえ、隣家との間に不釣合いな空間を設けないようにし、1階部分には下屋又はひさしを設ける。 ・駐車場や庭等を確保するため、やむを得ず建物を後退させる場合には、和瓦葺の門・塀等を設置し、町並みの連続性を保つようにする。
	材料色彩	・腰部分は板貼りに類するもの、その上部はしっくい壁又はこれに類するものとする。 ・外壁は、白又は灰色もしくは茶系統の落ち着いた色彩のものとする。
開口部		・通りに面する部分の窓、格子等は、和風調の意匠とする。・シャッターを設置する場合は、パイプシャッター等とする。
建築設備		・建築設備は、通りから見えにくいように設置する。
日除け施設		・日除け施設は、意匠及び色彩に配慮して、町並みや建物本体と調和のとれたものとする。
広告物		・広告物は、建物本体と調和のとれた落ち着きのあるものとする。・屋上広告物は設置しない。・落ち着いた色彩とするため、基調色は低彩度もしくは素材色とする。

- ・周囲に与える突出感や違和感を軽減するような意匠とする。
- ・基調とする色彩は、落ち着きのあるものとする。

(赤穂市都市計画課資料より作成)

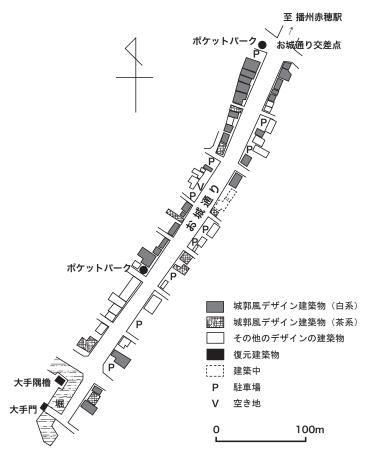
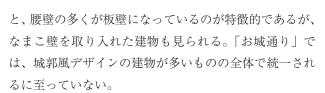


図5 「お城通り」における建築物の意匠(2014年) (現地調査により作成)



写真 3 「お城通り」西側の城郭風建物が連続する町並み (2014年3月, 筆者撮影)



次に、沿道の建物の階数と高さについてみる(図6)。 景観形成基準で定められたとおり、階数は3階以下に抑 えられているが、平屋、2階建て、3階建ての建物が混



写真 4 「お城通り」東側の駐車場が散見する町並み (2014年3月, 筆者撮影)

在し、一部に3階屋根の上に小屋根を有する越屋根 4)の高い建物も存在する。スカイラインは統一されておらず、伝統的な町家景観では統一されている1階の庇部分の高さも不揃いである(写真5)。城郭風建物の高さがまちまちであることも、景観に統一感が感じられない理由となっている 5)。

「お城通り」の景観は城下町赤穂を強く印象づけるもの

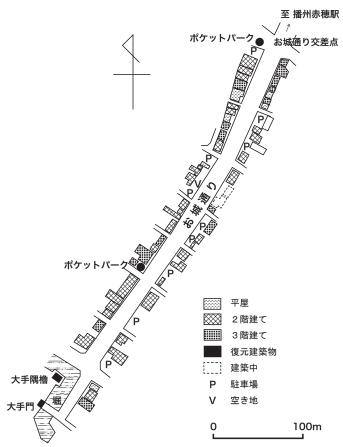


図 6 「お城通り」における建築物の階数 (2014年) (現地調査により作成)



写真 5 高さが不揃いな「お城通り」の家並み (2014年3月, 筆者撮影)



写真 6 復元された「息継ぎ井戸」とからくり時計 (2014年3月, 筆者撮影)

ではあるが、「お城通り」はかつての町人地で町家が建ち並んでいた場所に位置し、道路の形態は城下町特有の筋違いで、幅員も6mほどであった。今日目にする沿道景観は、江戸期の都市の町人地に見られた本二階や厨子二階の平入りの町家が立ち並ぶ景観にはほど遠い。「お城通り」の景観は、城下町風をテーマとしていることを除けば、地域の歴史的連続性とは無縁であるといえよう。た

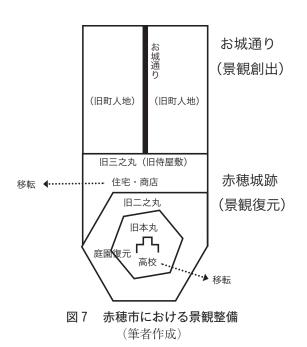
だし、城郭風デザインの建物が連なる景観が、地域住民 や来街者に城下町赤穂の歴史を想起させることは間違い ない。

お城通り交差点付近にあるポケットパークには、忠臣 蔵ゆかりの「息継ぎ井戸」が復元され、忠臣蔵の世界を 再現するからくり時計「義士あんどん」が設置されてい る(写真6)。さらには街路樹として植えられたクロマツ が刃傷事件のあった「江戸城松之大廊下」を連想させる。 歩道に設置された案内板が、義士の討ち入り装束をモチーフにデザインされるなど、徹底して「忠臣蔵」にこだわっている。ここでは、中西(2007)のいう過剰なまでの「創りこみ」が行われている。

IV 景観復元と景観創出にみる地域の記憶

赤穂市では、景観復元と景観創出という二つの手法を 用いて景観まちづくりを進めてきた(図7)。文化遺産で ある赤穂城跡の復元事業においては、真正性を考慮した 事業を展開してきた。ただし、復元で選ばれた時代は「忠 臣蔵のふるさと」につながる浅野家時代である。赤穂城 跡の整備が進むなか、旧本丸では、保存運動があったに もかかわらず、1928(昭和3)年築の赤穂高等学校の校 舎が取り壊わされた。同様に、旧三之丸に存在した住宅 や商店は排除の対象とされた。赤穂市のシンボルづくり としての城跡の復元において、高等学校や住宅、商店が 形づくる空間、すなわち日常生活空間は選ばれる対象と はなりえなかった。

一方、「お城通り」の景観整備にあたっては、景観創出という手法が用いられた。現代の生活にそぐわない細街路は拡幅され、「お城通り」には地域のシンボルあるいは観光資源としての価値が新たに吹き込まれた。しかし、そこには城下町風というテーマを除けば、歴史性という概念は存在しないか、あったとしても希薄である。ただし、その景観が地域住民や来街者に城下町赤穂を想起させることは間違いない。景観形成基準に沿って建物の外



壁を白壁とし、腰壁に板壁やなまこ壁を採用するなど、 城下町を想い起こさせる典型的なデザインが採用されている。「お城通り」の景観整備事業は「忠臣蔵のふるさ と」という地域の記憶を再確認する、あるいは再認識さ せる事業と見ることができよう。

V おわりに

本稿では、全国的な城郭整備の動向を整理・検討した うえで、兵庫県赤穂市を対象として、旧城下町における 景観復元、景観創出の意義について、地域の記憶という 観点から検討してきたが、結果は以下のようにまとめる ことができる。

第2次大戦中のアメリカ軍の空襲によって焼失した天守の外観復元が進む一方で、明治初期またはそれ以前に天守を失った旧城下町では、地域活性化や観光施設化を目的として、天守を再建する例がみられた。しかし、その中にまちづくりという観点はまだ希薄であった。1980年代以降の天守の建設は、まちづくり全体の中に位置づけられるようになった。赤穂市における城跡の発掘・復元整備は、義士の町のシンボルづくりとして、まちづくり全体の中に位置づけられた。

赤穂城跡の発掘・復元整備事業に、現在に至るまでの 歴史的連続性を見出すことができるが、「お城通り」にお ける景観整備事業では、城下町風というイメージのみが 先行し、歴史性は希薄である。「お城通り」の景観創出事 業は「忠臣蔵のふるさと」という地域の記憶を再確認す る事業であった。

本研究では、主に行政が進める景観整備事業に注目してきた。しかし、地域の景観が第一には住民のものであることを考えれば、景観整備事業に対する地域住民の認識を把握する必要がある。住民の立場から景観まちづくりを検討することを今後の課題としたい。

注

- 1)「地域の記憶」は明確に定義できないが、本稿では、地域 社会で共有される記憶であり、来街者が想起する記憶を含 むものとする。
- 2) 史実を基準として天守は以下の五つに分類できる。①現存天守: 2014年現在で全国に12基ある。②復元天守: 位置・規模・外観・構造とも史実に基づき忠実に再建された天守をいう。③外観復元天守: 外観のみ史実に基づいて再建された天守をいう。④復興天守: 位置・規模はおおよそ史実と同様に再建された天守をいう。⑤模擬天守: 実在しなかったか、推定・想像の割合が大きい天守をいう。このほかに、

- 厳密には天守ではないが、商業・文化施設、記念碑などの 天守風建物もある。
- 3) 1702 (元禄15) 年に赤穂浪士討ち入り事件が発生し、その後、浅野家は断絶する。
- 4) 屋根の上に採光・換気のための小屋根を持つ屋根のことであるが、「お城通り」では塔屋が小屋根のデザインになっている建物が見られる。
- 5) 城下町の町家風の景観創出を行った滋賀県彦根市の夢京 橋キャッスルロードでは、全ての建物が2階建てで黒と白 を基調とした和風建築で統一されている。

文献

- 赤穂市教育委員会生涯学習課(2004):『赤穂市の自然と歴史 から文化を楽しむ』赤穂市教育委員会,21p.
- 生野国男・篠野志郎 (2002):播州赤穂城・城下町の形成過程 における都市構造の変質と侍屋敷の関係について. 日本建 築学会計画系論文集, 552, 279-286.
- 片柳 勉 (2007):イギリス,ストラトフォード・アポン・エイヴォンにおけるヘリテージ・ツーリズム―観光資源としてのシェークスピアの遺産と歴史的町並み―. 地域研究,47-2,1-16.
- 片柳 勉 (2011): 城下町の記憶を活かしたまちづくり. 地 理. 56-4.64-72.
- 川島和彦・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也(1999):静岡県

- 掛川市における「城下町風街づくり事業」の展開に関する研究―街並み景観形成を目的とした一連の施策・事業間の連携に着目して. 1999年度第34回日本都市計画学会学術研究論文集, 799-804.
- 木下直之(2007):『私の城下町 天守閣から見える戦後の日本』 筑摩書房、362p.
- 佐藤 滋 (1995):『城下町の近代都市づくり』 鹿島出版会, 224p.
- 佐藤 滋·城下町都市研究体(2002):『図説城下町都市』鹿島出版会,183p.
- 中川 理 (1996): 『偽装するニッポン 公共施設のディズニーランダゼイション』 彰国社, 252p.
- 中西和子 (2007):城下町における都市の景観復元に関する課題一滋賀県長浜市を事例に一. 歴史地理学, 232, 38-43.
- 橋爪紳也 (2012): 『ニッポンの塔―タワーの都市建設史』河 出書房新社、199p.
- 兵庫県まちづくり技術センター (2004):住民と行政が共につくる "平成の城下町". CON-TECH ひょうご, 20, 3-4.
- 福田珠美 (1996):赤瓦は何を語るか―沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動―. 地理学評論, 69-9, 727-743
- 宮崎素一(2010): 史跡と名勝庭園の保存と活用―赤穂城跡と 旧城下町のまちづくりについて―. 遺跡学研究, 7, 41-47.

A place memory found in landscape improvements in the old castle town Ako

KATAYANAGI Tsutomu*

* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Abstract:

In this paper, the author clarifies the significance of landscape restoration and landscape creation in old castle town from the perspective of place memory. After World War II, rebuilding of castle towers destroyed by the air raids by the United States Army Air Forces was carried out. On the other hand, in old castle towns, which lost a castle tower before the Meiji era, a castle tower was rebuilt for the purpose of local revitalization and tourism promotion. After the 1980s, the construction of the castle tower was correlated with town development. The excavation and the restoration in Ako Castle Ruins were correlated with the making of symbol of the town. It could be said that the landscape creation in Oshiro-dori Street was the operation of reconfirmation of the place memory "the hometown of Chushingura (The Treasury of Loyal Retainers)".

Key words: town development, landscape restoration, landscape creation, place memory, Ako